

# 旅行メディアにおけるカナダの魅力： 『地球の歩き方ガイドブック』シリーズ・カナダ編の 主要部分の分析

The Attractiveness of Canada in Travel Media:  
An analysis of the main part of the “Chikyu no Arukikata Guidebook” series, Canada edition

岩 田 晋 典

IWATA Shinske

愛知大学国際コミュニケーション学部

*Faculty of International Communication, Aichi University*

*E-mail: shinskito@gmail.com*

## Abstract

The functions of travel media include representing a destination in an attractive way and providing information on how to travel there. This paper refers to the former as “value information” and the part of the travel media where it is condensed (e.g., cover illustrations, feature articles, etc.) as “the main part”. By analyzing the main part of the Canadian editions of the “Chikyu no Arukikata Guidebook” series over the past 30 years, this paper aims to elucidate how Canadian attractions are represented in the travel media, or more simply put, what makes Canada unique in travel media. Through this analysis, the following three points became clear. First, the content of the main part is almost exclusively limited to the main regions of the East and West; second, the importance of nature is highlighted; and lastly, the content neglects the cultural diversity of Canada, a state known for its multiculturalism.

## 1. はじめに

本稿は、旅行メディアにおけるカナダの魅力の解明を目的に、『地球の歩き方ガイドブック』シリーズ・カナダ編に焦点を当て、同旅行メディアにおいてどのような場所・事物がカナダの観光対象と位置づけられているのか、その傾向を明らかにすることにある。

カナダは日本人海外旅行者が行きたい場所として挙げる国・地域の順位の中で、五本の指に入るとは言わないまでも、比較的上位に入る国であり続けている。たとえば日本交通公社が刊行する『旅行年報 2021』では、「行ってみたい旅行先」（海外旅行）のランキングで2018年は第7位、2021年では第10位となっている（日本交通公社 2021：38）。

ではカナダの何に人気があるのかというと、豊かな自然がその中心にある。『旅行年報 2019』の「旅行先（国・地域）別の現地活動（複数回答）」では、カナダは『自然や景勝地の訪問』において主要各国の中で最も多い77.4%を得ている（日本交通公社 2019：49）。同書は、『季節の花見』が全体より15ポイント以上、『ドライブ』が10ポイント以上となるほか、「『マラソン・ジョギング』『生活文化体験』『観光産業』『リゾート体験（高原）』『野生動物観察』など、幅広い体験が提供されていることがわかる」とも言っているが、ドライブなども含めてその大部分が自然を資源にした観光行動である。また、自然現象を鑑賞したい旅行先として「オーロラ観賞で有名」なカナダは2018年・2021年ともに第1位に輝いている（日本交通公社 2021：41）。こうした自然は『地球の歩き方ガイドブック』シリーズ・カナダ編においても中心的な位置を占めている。

自然を対象にした観光は、日本社会においてつねに人気であり続けてきた<sup>1)</sup>。世界がコロナ禍から回復途上にある現在、ポストコロナの観光のあり方として、自然を対象とした観光スタイルの人气が上昇するという予測が立てられることがある<sup>2)</sup>。そのとおりになるとすれば、カナダの人气がさらに上がる可能性も考えられる。

以下本稿では、こうしたカナダの魅力が旅行メディアでどのように表象されているかを『地球の歩き方ガイドブック』シリーズ・カナダ編（以下カナダ編）に焦点を当てることで明らかにしたい。カナダ編は、1979年にアメリカ・カナダ・メキシコ編として始まっており、1985年にアメリカ・カナダ編となったあと、1986年にカナダ編として独り立ちしている。本稿では、1980年代の計4版は適宜言及するに留めることとして、1990年代以降2019年刊行の第32版までの計28件を対象にする。限定の主な理由は、『地球の歩き方ガイ

1) たとえば2000年以降の日本交通公社『旅行年報』による統計を見ても、「自然観光」は「行ってみたいタイプ」のランキングの中で2位に位置し続けている。

2) たとえば英国の旅行ニュースサイト“Tourism Review”は、コロナ後の旅行トレンド10個の筆頭に「自然への逃避」を選んでいる。詳しくは同サイト2022年9月5日配信の記事‘TOP 10 TRAVEL TRENDS BROUGHT ABOUT BY COVID’を参照（<https://www.tourism-review.com/travel-trends-of-the-post-covid-times-news12677>、2022年11月21日閲覧）。

ドブック』シリーズが扱うデスティネーションが1990年代に一挙に増加して現在の地理的範囲に近づき、かつ、2020年にダイヤモンド・ビッグ社が同シリーズを含む出版業務を学研プラスに譲渡しているというように、この30年間が同シリーズにとっての一つの時代的な区切りを形成しているとみなすことができるからである。

## 2. 分析の対象と方法

### 1) 「地球の歩き方ガイドブック」カナダ編

「地球の歩き方」という名を冠する旅行ガイドブックシリーズはいくつかあるが、その中でも『地球の歩き方ガイドブック』シリーズは最も歴史が長い。日本の旅行ガイドブック全体を見ても、最も網羅的に地球上の国々・地域を扱うシリーズであり、最もポピュラーな旅行ガイドブックだと言っても過言ではない。2020年11月の学研プラスへの譲渡が大きな話題になったことは、このシリーズのポピュラーさを物語っている。

同シリーズにおけるカナダの取り扱い、早くも同シリーズ開始の1979年、すなわちアメリカ・カナダ・メキシコ編とともに始まっている。とはいっても、それは、メキシコとともにアメリカ旅行のおまけのような取り扱いであり、同編初版の表紙の「アメリカ」と「カナダ」・「メキシコ」の字体の大きさの違いや、奥付の書名がただ『地球の歩き方 ②アメリカ』である事実に表れている（ダイヤモンド・スチューデント友の会 1979）。

また、アメリカ・カナダ・メキシコ編における米国の取り扱い部分が増加していくと、アメリカに押し出されるかのように、メキシコそしてカナダはそれぞれ巻として独立している。1979年のアメリカ・カナダ・メキシコ編初版の目次にある観光地を見ると、米国31ヶ所、カナダ6ヶ所、メキシコ5ヶ所であったのが、第6版では米国46ヶ所、カナダ9ヶ所、メキシコ5ヶ所であり、第7版になるとメキシコを除外したアメリカ・カナダ編にシェイプアップされ、米国52ヶ所、カナダ8ヶ所というように、両者の取り扱いの差は広がっている。

こうしてカナダ編は、米国の“付録”から独立する形で1986年に初版が刊行され、それ以来、「地球の歩き方ガイドブック」シリーズの他デスティネーションと同様にほぼ毎年版を重ねている。また1995年からは「地球の歩き方ガイドブック」シリーズ・カナダ東部編と同カナダ西部編も隔年ベースで刊行されてきている。

### 2) 旅行ガイドブックの価値情報とマニュアル情報

さまざまな旅行ガイドブックの内容を見ると、デスティネーションを魅力的に提示したり、何が重要なのかを提示する部分と、旅行を円滑に進めるためのプラクティカルな情報に関する部分という二つの情報が旅行ガイドブックの大半を占めていることが分かる。たとえば名所の見どころは前者の性格が強いものであるが、対照的に交通網や通貨、電圧と

いったものは後者に属するものだ。美術館についていえば、美術館の歴史、絵画の解説は前者に該当するのに対して、美術館の入館料や開館日時は後者になろう。

本論では分析を円滑にするために、前者を価値情報、後者をマニュアル情報と呼び分けよう。デスティネーション内の個々の地域に関するエリア情報の箇所では、魅力的な表現で当地の素晴らしさをアピールする価値情報から始まり、じょじょにアゴ・アシ・マクラに関する実際の情報が比重を増していくことが珍しくない。こうした価値情報がマニュアル情報に先行するという図式は、エリア情報内のレストランの紹介箇所などにも入れ子構造的に配置されている。

### 3) 主要部分

旅行ガイドブックの中には価値情報が中心になる部分がある。本稿ではそれを便宜的に主要部分と呼ぶことにする。

「地球の歩き方ガイドブック」シリーズは、最初期をのぞいてイラスト主体の表紙(図)、表紙上のキャッチコピー(2002年前後まで)、扉絵、エッセイ的なデスティネーション紹介文、地理的なデスティネーション紹介(統計や国旗、通貨、電圧などのマニュアル情報が主)、巻頭特集、エリア情報(個々の観光地・観光場所についての情報)、ボックスコラム、エリアガイド内特集、巻末情報、索引、そして広告といった内容で構成されている。

この中で主要部分と言いうるものは、表紙、表紙コピー、扉絵、エッセイ的なデスティネーション紹介文、巻頭特集となろう。たとえば、あの特徴的な表紙イラストは、初期の素朴なものから現在の写実性の高いものまで、各デスティネーションを象徴する事物をカラフルに描いたものである<sup>3)</sup>。同シリーズのスタートとなったアメリカ・カナダ・メキシコ編とヨーロッパ編は文字(コピー)を全面に出したものであるが、1981年刊行のインド編初版がすでにイラストを全面に用いているように、同シリーズはすぐにイラスト主体の表紙にシフトしている。

表紙のイラストまでではないにしても、表紙のコピーや巻頭特集も価値情報が強く表れるものである。表紙のコピーは、青い小口や“下手ウマ”なイラストとともに、かつての“歩き方”を特徴づけていた、ロマンチックに行き先を謳う詩のような文言のことである。2002年前後のリニューアルまで表紙で使われ続けた<sup>4)</sup>。編によってはマニュアル情報を用いたコピーも存在したが、それはアメリカ編やヨーロッパ編など比較的大きな地域を扱った巻に限られており、ほとんどのコピーはデスティネーションの魅力つまり価値を表現したものである。

3) 「地球の歩き方ガイドブック」シリーズのイラストは一貫してデザイナーの日出嶋昭男氏が描き続けている。詳しくは(山口・山口, 2009) 参照。

4) 2002年の「地球の歩き方ガイドブック」シリーズのリニューアルについては(山口・山口, 2009)を参照。

エッセイ的なデスティネーション紹介文は、インド編のように2010年前後まで掲載され続けたものもあるが、大半は、表紙コピーと同様に、同シリーズの比較的初期に見られたものである。目次の前に配置されることが多い。たとえばカナダ編初版では、「カナダ時」というタイトルでカナダの魅力を語る一文が1ページを割いて掲載されている（詳しくは次章）。

巻頭特集は、同シリーズのスタートからずっと加えられてきたものではなく、また、ある年に一斉に加えられたものでもない。たとえばアメリカ編では1987年刊行のものにアメリカの「大自然」についての特集が設けられているものの、イタリア編で巻頭特集が登場するのは1999年まで待たなければならない。

巻頭特集ではおもに、同シリーズがその時々において観光する価値があると考えた事物が紹介されている。紹介対象には、当該デスティネーションの定番のようにになっているものもあれば、オリンピックやサッカーW杯に関連したもののように、特定の時期に限られたものもある。また、とくに観光対象というわけではなく、旅行のプラクティカルな情報がまとめて掲載される場合、つまりマニュアル情報が中心の巻頭特集も稀にある<sup>5)</sup>。

こうした主要部分は、『地球の歩き方ガイドブック』シリーズの作り手が何を用いて当該デスティネーションの魅力を表現しているのかを理解する上で最も適したものである。カナダ編であればそれは、同シリーズが読者に“これがあなたたちが経験すべきカナダである”と伝える表象にほかならない。次章ではこうした主要部分に焦点を当てて、カナダ編の価値情報の内容を探ってみよう。



図 『地球の歩き方ガイドブック』シリーズ・カナダ編第5版の表紙（地球の歩き方編集室1991）

### 3. カナダ編の主要部分

以下では、カナダ編の主要部分として、表紙イラストと扉絵、エッセイ的なデスティネー

5) たとえば『地球の歩き方ガイドブック』シリーズ・アメリカ編の第11版・第12版の米国国内線航空便の利用方法の特集など。

ション紹介文と表紙コピー、巻頭特集の五項目に注目し、三節に分けて見ていこう。

## 1) 表紙イラストと扉絵

表1は、第5版から第32版までのカナダ編の表紙イラストと扉絵に表れる記号を西暦順にまとめたものである。表紙イラストと異なり、扉絵ではすべて写真が用いられている。

表紙イラストは、一つの風景を描いたものがほとんどである(図)。実際にカナダのどこかで見ることができる風景をもとにしている場合もあるが、場所の特定が容易ではなく作り手がカナダ的なもの——それこそが本稿の探求対象なのであるが——をイメージして描いたと思われる場合もある。これは他の「地球の歩き方ガイドブック」シリーズにも言えることであろう。一つの風景を描いたものとは異なる例外的なケースとしては第12版の表紙があり、当時バンクーバーを本拠地にしていたNBAチームの選手やバンクーバーの観光地をコラージュ風に組み合わせた内容になっている。

他編と同様に画風が初期のシンプルなものからじょじょに写実的なものに変遷してきたことから、イラストで描かれる風景が特定の場所のものであるかは、最近になればなるほど把握しやすい。逆に第5版の表紙イラストやそれ以前の1980年代のものは、素朴・簡素である点で、いわば匿名的であり、具体的にどこが想定されているのか特定し難い。ただ、そのぶん喚起力が強いと言うこともできよう。

表1 「地球の歩き方ガイドブック」カナダ編の表紙イラストと扉絵写真

出版年	版	表紙記載年	表紙イラスト	扉絵写真
1990	5	—	雪をいただく山脈を背景に、草原で馬に乗る人	雪をいただく山と湖の写真3枚(うち1枚は2人が乗ったボートが浮かぶ)
1991	6	1991-1992	山と森を背景に湖とカヌーを漕ぐ人	雪をいただく山をバックに湖でカヌーを漕ぐ2人。また都市の俯瞰写真がコラージュ的に組み込まれている
1993	7	1992-1993	グリーンゲイブルズが見える畑をスキップする赤毛の少女	ロジャースセンターとCNタワーから広がるトロントの俯瞰写真
1993	8	1993-1994	カナダ国旗を掲げて虹がかかるナイアガラの滝を見物する人々	もやの立ちこめる湖、その向こうに見える草原と小屋
1994	9	1994-1995	雪をいただく山脈と湖そして紅葉の森を背景に、馬2頭にまたがる2人、地面にはカエデの落ち葉	急流をラフティングする4人
1995	10	1995-1996	シャトー・フロンテナックを背景にカナダ国旗を掲げる王立騎馬警察	ロブソン山を背景にキャンピングカーの傍らで食事する家族連れ



1996	11	1996-1997	ロジャースセンターとCNタワーが見えるトロントのスカイラインと湖、フェリーから湖を眺める人々	ハリファックス・シタデルの衛兵
1997	12	1997-1998	競い合うNBAの選手（バンクーバー・グリズリーズと対戦相手）、その背景に3ヶ所（雪山と森を背景にしたカナダ・プレイス、バンクーバー中央図書館など）	ビル・リードの彫刻『The Raven and the First Men』
1998	13	1998-1999	雪の山脈と緑の森を背景にカヌーでモレーン湖を進む親子風の3人組	壁画アート（場所は不明）
1999	14	2000-2001	カスケード・ガーデンからバンフ通りとカスケード山を眺めるハイキング風の2人	夏の湖を望む場所でくつろぐ親子（父と幼児2人）
2000	15	2001-2002	雪の山脈を背景にしたコロンビア大氷原、2台の雪上車と観光客	雪をいただく山と湖、森、船着き場
2001	16	2002-2003	ロジャースセンターとCNタワーが見えるトロントのスカイラインと湖、その湖畔でお茶を飲むカップル	アフリカ系の若者による路上パフォーマンス（場所は不明）
2002	17	2002-2003	雪の山脈と湖、草原に建つプリンス・オブ・ウェールズ・ホテル	水辺に記念碑として立つトーテムポール
2003	18	2003-2004	雪山を背景にしたバンフ通り、カナダ国旗	ナイアガラの滝
2004	19	2004-2005	雪をいただく山を遠景、森を背景にしたウィスラーの街並み	チューリップ・フェスティバル開催時の国会議事堂
2005	20	2005-2006	ビッグホーンシープを中心に雪をいただく岩山、湖、森	ビクトリア州議事堂
2006	21	2006-2007	カエデのユニホームのアイスホッケー選手	国会議事堂とセンテニアル・フレイム
2007	22	2007-2008	虹がかかるナイアガラの滝の前を進むフェリー	カスケード・ガーデンから見たバンフ通りとカスケード山
2008	23	2008-2009	グリーンゲイブルズ前の庭で花を眺める赤毛の少女	海を遠景にしたプリンス・エドワード島の畑とトラクター、黄色い花の野原
2010	24	2010-2011	ウィスラー山頂のイスクシユク	サルファー山頂から見たバンフの街とカスケード山
2011	25	2011-2012	雪の山脈を眺めるトレッキング客	プリンス・オブ・ウェールズホテルの遠景（山、湖、野花）
2012	26	2012-13	バンフスプリングスホテル、山脈	カナダ国旗が翻る国会議事堂とチューリップ
2013	27	2013-14	モントリオールのジャック・カルティエ広場	虹がかかるナイアガラの滝
2014	28	2014-15	湖から見たトロントのロジャースセンターとCNタワー	グリーンゲイブルズのアンの部屋

2015	29	2015-16	国旗の翻る国会議事堂とチューリップ	赤いカエデの葉
2016	30	2016-17	バンデューセン植物園を歩く女性	コロンビア大氷原のツアー風景
2017	31	2017-18	エメラルド湖をカヌーで進む親子連れ	花火が飛び交う国会議事堂と国旗
2019	32	2019-20	虹がかかる紅葉のナイアガラ滝	雪が残る高山のトレッキング

注) 表紙記載年は下二桁のみ記載されているものもあるが、ここでは四桁で統一している。また、表紙イラストの元になった地域名・場所名は掲載されていないので、形状や構図などをもとに推測したものを記している。また、場所の特定に際して、本学法学部用岡田健太郎准教授からお力添えをいただいた。

## 2) エッセイ的なデスティネーション紹介文と表紙コピー

前章で言及したとおり、カナダ編でもエッセイ的なデスティネーション紹介文が用いられている。初版から第4版までと、掲載は比較的短く、その間内容に変化は見られない(地球の歩き方編集室 1988:3)。

### 「カナダ 時」

カナディアン・ロッキーの湖、ペイト・レイク。

その神秘的なサファイア・ブルーは、氷河が運んでくるという。

山肌をすべり、岩を削り、氷河の融解する末端に堆積するモレインが、鮮やかに湖の色を着ける。

氷河は移動する。ゆっくりと。

まるで生きもののようになり、成長したり、縮小したりしながら、谷や湖を形づくってゆく…。

大自然の中で、銀色に輝くグレイシャーを仰ぎみると、“大きな時の流れ”を感じることができる。

“美しく広大な大地と多彩に変化して息づく森と湖”だれもがすぐに思いつくカナダのイメージ、すでに使い古されたフレーズだ。

カナダという国が、あまりにも広すぎるからか…。

多くの人たちが、その魅力を語りつくそうとして、いつもつまづいてしまう。きっと言葉が大自然のエネルギーに、打ちのめされてしまうから、だと思ふ。

カナダの魅力？ それは美しいでもなく、きれいでもだめ。

赤毛のアンの言葉をかりるなら、“気持ちのいい痛み”ということになる。

ここで表現されているのは、カナダの大自然への畏怖といったものであろう。陳腐な言葉に頼ることを戒めつつ、大自然が「神秘」、「大きな時の流れ」、「エネルギー」、「打ちの



めされる」、「気持ちのいい痛み」などの言葉を用いて、気軽に楽しむためのモノではなく、敬意を払わなければならない人智の及ばぬ圧倒的な存在として描写されている。

一方、表紙コピーは他編と同様に2002年前後のリニューアルまで使われ続けている(図)。

きらめく氷河

果てなしの大平原

赤毛のアンにも会いました

どこもかしこも美しい

さわやかカナダのパノラマ・ガイド

第9版から「果てなしの」が「果てしない」に変わったくらいのわずかな変更が見られるくらいで、それ以外は約15年間同じコピーであり続ける。

短いコピーには、紹介文のような自然への畏怖は見られないものの、基本的に同じ図式にのっとっている。すなわち、ちっぽけな人を時間的にも空間的にも容易に飲み込んでしまう大自然が「氷河」と「大平原」、「パノラマ」という語彙で表され、そこに「赤毛のアン」が追加的に組み込まれているというものである。

### 3) 巻頭特集

表2は巻頭特集の一覧である。すべて目次に記載された特集名称を書き出している。巻頭特集は、第12版をのぞいて、通常複数の特集で構成されている。見やすさを考慮に入れて、1, 2, 3…のように、通し番号を加えた。また、第13版のように全体をまとめる名称が用いられている場合や、第26版のように階層化されている場合もある。前者では、全体をまとめる名称は番号なしとしている。後者では、下位分類に丸番号(①、②、③…)を割り振っている。

カナダ編では第9版から巻頭特集が見られる。巻頭の計8ページを割いて、「メープル街道」と「ビーバー街道」の魅力を紹介している。その前年版である第8版には巻頭特集はなく、目次や広告のあとすぐにエリア情報が配置されている。しかしながら、エリア情報ははじめのカナディアン・ロッキーに関する紹介箇所は、一見巻頭特集かと見紛うような外見になっている。見開き一ページで、青い水面とボート、深緑の針葉樹林、雪をいたたく岩山という写真が使用され、「悠久の時空間 カナディアンロッキー」というタイトルで、デスティネーション紹介文を想起させるロッキー山脈賞賛のリード文が掲載されている(地球の歩き方編集室 1993: 10-11)。

表2 「地球の歩き方ガイドブック」カナダ編の巻頭特集

出版年	版	巻頭特集
1990	5	(無し)
1991	6	(無し)
1993	7	(無し)
1993	8	(無し)
1994	9	1. メープル街道 2. ビーバー街道
1995	10	(前年版と同じ)
1996	11	1. メープル街道に見る2つの文化 2. カナダ西部の2つの魅力！BC & AB
1997	12	カナダの土地と人々
1998	13	カナダのイベント 1. オカナガン・バレー ワイン・フェスティバル 2. ケベック・シティ ウィンター・カーニバル 3. オタワ チューリップ・フェスティバル
1999	14	カナダの最新情報 1. スナブット準州誕生 2. パンクーバー水族館に新パビリオン 3. エア・カナダ・センターがオープン 4. 観光列車ティンバー・トレイン 5. タイタニック・ツアーが人気
2000	15	カナダドライブ紀行 1. BC ロッキーズで自然を満喫 2. 世界一美しいドライブウェイ PEI
2001	16	1. カナダ西部ドライブ紀行 2. カナダ東部フェスティバル紀行 3. カナダ東部リゾート紀行 4. カナダ東京トピックス
2002	17	1. カナダの世界遺産 2. カワイイ！オイシイ！カナダのおみやげ
2003	18	1. カナダ 四季の魅力 2. カナダ 食べ歩き 3. カナダワインを味わう ふたつのワインルート 4. カナダで見つけた 厳選おみやげGOODS 5. 雄大なゲレンデは自分だけのもの カナダでスキーを楽しもう
2004	19	1. 東西ハイライト案内

2004	19	<ul style="list-style-type: none"> <li>2. 目的別モデルコース</li> <li>3. カナダの食めぐり</li> <li>4. おみやげセレクション</li> <li>5. カナダでスキーを楽しもう</li> </ul>
2005	20	<ul style="list-style-type: none"> <li>1. カナダ大自然の魅力</li> <li>2. 大自然もいっぱいカナダ観光モデルルート</li> <li>3. カナダで食べたい美食メニューカタログ</li> <li>4. カナダで買いたいおみやげ図鑑</li> <li>5. カナダでスキーを楽しもう</li> </ul>
2006	21	<ul style="list-style-type: none"> <li>1. カナダ NEW TOPICS</li> <li>2. VIA鉄道カナディアン号 大陸横断鉄道の旅</li> <li>3. 北米のプロスポーツ観戦に出かけよう！</li> <li>4. カナダで食べたい 美食メニューカタログ</li> <li>5. カナダで買いたい おみやげ図鑑</li> </ul>
2007	22	<ul style="list-style-type: none"> <li>1. カナダ大自然の冒険</li> <li>2. カナダで楽しめる動物ウォッチング</li> <li>カナダカルチャー講座（3～6）</li> <li>3. 先住民の世界へ</li> <li>4. トーテムポールの話</li> <li>5. カナダのアートを知るための4つのキーワード</li> <li>6. カナダの世界遺産</li> <li>7. カナダのおみやげ</li> <li>8. カナディアンブランド</li> <li>9. 絶対食べたい名物料理 IN CANADA</li> <li>10. ファストフード大集合</li> </ul>
2008	23	<ul style="list-style-type: none"> <li>1. Celebrate 100 years!! アンの故郷プリンス・エドワード島へ</li> <li>2. 飛び込め！カナダの大自然の懷へ</li> <li>3. カナダの世界遺産</li> <li>4. カナダのおみやげ</li> <li>5. スーパーマーケットでおみやげさがし</li> <li>6. 絶対食べたい名物料理 IN CANADA</li> <li>7. ファストフード大集合</li> </ul>
2010	24	<ul style="list-style-type: none"> <li>1. 今行くべき場所 ベストセレクト12</li> <li>2. カナダ先住民族のアート インディアン・ジュエリー</li> <li>3. カナダ生まれのナチュラルコスメ</li> <li>4. カナダのおみやげ</li> <li>5. カナダの名物料理</li> </ul>

2010	24	6. ファストフード in CANADA 7. 個性色々、カナダのホテル
2011	25	1. 行きたい場所が見つかる！ テーマで巡るカナダ12の旅 2. シーフードから牛肉まで6つのキーワードで探す 絶対食べたいカナダの名物料理 3. 財布も喜ぶメニューがいっぱい みんな大好きファストフード in CANADA 4. 先住民の世界観が詰まった芸術品 ネイティブ・アートをおみやげに 5. 超定番物から女子が喜ぶナチュラルコスメまで カナダのおみやげ決定版 6. エア・カナダで行こう！今、旅してみたいCANADA'S FOUR SEASONS
2012	26	1. 今、行くべき旅先No.1 極地の夜空を彩る光のカーテン オーロラを見に行こう 2. 大自然、カルチャー、アクティブ、グルメ&ショッピングに分けて提案 今、行くべきカナダの旅 セレクト10 ①大自然の旅 カナディアン・ロッキー ②大自然の旅 メープル街道 ③大自然の旅 ナイアガラの滝 ④カルチャー旅 『赤毛のアン』のプリンス・エドワード島 ⑤カルチャー旅 プリティッシュ・コロンビア州とアルバータ州で先住民文化を体感 ⑥カルチャー旅 ヨーロピアンムード漂うビクトリア、ケベックシティ ⑦アクティブ旅 バンクーバー島 ⑧アクティブ旅 モントリオールでサイクリング ⑨グルメ&ショッピング旅 名物料理とB級グルメ ⑩グルメ&ショッピング旅 おみやげ大集合
2013	27	1. 四季で見るカナダの絶景巡り旅 2. カナダで楽しめるスーパーアクティビティ&アトラクション 3. 自然王国・カナダのワイルドライフ・ウォッチング 4. カナダ各地の名物料理を味わいつくそう 5. カナダ生まれ B級グルメが大集合～ 6. ハズレなし！ 王道みやげを攻略
2014	28	1. 羽田～トロント便就航！ カナダ最大の都市トロントを24時間遊び尽くせ★ 2. 色で巡る絶海のカナダ 3. 絶対☆やりたい ツアー&アクティビティ&アトラクション Select 10 4. 絶対食べたい！ カナダの名物料理 5. お手軽にスイーツタイム♡ 魅惑のB級スイーツ 6. 必ず買いたい カナダみやげ研究
2015	29	1. カナダでやりたい！ ウィッシュリスト7 ①カナディアン・ロッキーで絶景をカメラに収めたい！

2015	29	<p>②バンクーバー島でウオーターアクティビティを極めたい！</p> <p>③ウィスラーで憧れの海外スキーデビューをしたい！</p> <p>④イエローナイフでオーロラを見たい！</p> <p>⑤ナイアガラでアトラクションでテンションMAX！</p> <p>⑥アルゴンキン州立公園で紅葉の森をカヌー&amp;ハイキングしたい！</p> <p>⑦プリンス・エドワード島で赤毛のアンの世界にどっぷり浸かりたい！</p> <p>2. City of CANADA カナダの大都市を歩く(バンクーバー、ビクトリア、トロント、オタワ、モントリオール、ケベック・シティ、ハリファックス)</p> <p>3. 必ず買いたい カナダみやげ研究</p> <p>4. 絶対食べたい！ カナダの名物料理</p>
2016	30	<p>1. カナダの大自然を旅する</p> <p>①緑と青が織りなす絶景の地 カナディアン・ロッキー</p> <p>②轟音をとどろかす大瀑布 ナイアガラ滝</p> <p>③大地を埋め尽くす紅葉の森 メープル街道</p> <p>④夜空を彩る天体ショー オーロラ</p> <p>2. カナダなんでも☆RANKING!</p> <p>3. City of CANADA カナダの大都市を歩く(バンクーバー、ビクトリア、トロント、オタワ、モントリオール、ケベック・シティ、ハリファックス)</p> <p>4. 知っておこう！ カナダのおみやげ入門</p> <p>5. ココでコレを食べたい！ カナダ各地の名物料理MAP まだまだあるカナダの名物料理カタログ</p>
2017	31	<p>1. 定番観光とは少しだけ違う視点で楽しむ カナダ見どころ&amp;体験ハイライト Select 6</p> <p>①ハイキングやカヌーで大自然の懷に飛び込む！ カナディアン・ロッキー</p> <p>②最新アトラクション&amp;美しい景観を探す ナイアガラ滝</p> <p>③山頂or湖面ふたつの視点から紅葉ウオッチ メープル街道</p> <p>④秋と冬どっちもOK! オーロラ観賞</p> <p>⑤世界で唯一のキセキ ハープシールの赤ちゃんに会いに行く 野生動物観賞</p> <p>⑥赤毛のアンで島の面影を探す プリンス・エドワード島</p> <p>2. カナダの中のフランス、モントリオールを旅する</p> <p>3. どんな休日を過ごす？ バンクーバーからの週末トリップ(フォート・ラングラー、ソルト・スプリング島、ウィスラー、ビクトリア)</p> <p>4. 寒いからこそ、美しく、楽しいことがある！ 冬のカナダで自然&amp;街あそび</p> <p>5. 思い出と一緒に持って帰ろう カナダのおみやげ ローカルも御用達！カナダのスーパーをフル活用★</p> <p>6. お肉派？シーフード派？ カナダ名物料理ランキング</p>
2019	32	<p>1. 季節ごとに異なる顔を見せる四季のカナダ</p> <p>春：美しきガーデン巡り(バンクーバー、ビクトリア、オタワ)</p>

2019	32	<p>夏：アクティビティで自然と遊ぶ（ソルト・スプリング島、ウィスラー、カナディアン・ロッキー、ナイアガラ・フォールズ）</p> <p>秋：紅葉リゾートで癒やされる（アルゴンキン州立公園、モントリオール、モン・トランブラン、イースタン・タウン、シップス、ケベック・シティ、オルレアン島）</p> <p>冬：神秘のオーロラを追いかけて（ホワイトホース、イエローナイフ）</p> <p>2. カヌーの聖地カナダで体験！ ユーコン川4泊5日究極カヌートリップ</p> <p>3. 大自然だけじゃない！カナダの魅力を探る テーマで回るカナダ旅（赤毛のアン、野生動物ウォッチング、先住民族、カナディアンアート）</p> <p>4. ローカルも御用達！カナダのスーパーをフル活用★ スーパーで指名買いすべき☆おいしいアイテムCollection！</p> <p>5. 思い出と一緒に持って帰ろう カナダのおみやげ</p> <p>6. お肉派？シーフード派？ カナダ名物料理ランキング カナダ生まれのファストフード店</p>
------	----	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

以上、表紙イラストと扉絵、エッセイ的なデスティネーション紹介文と表紙コピー、巻頭特集を順に見てきたが、内容の全体的な分布に一種の序列のようなものを見出すことが可能である。すなわち、旅行者が現地で経験すべきカナダ的な風景や事物が巻頭特集で示されており、その中でさらに重要なものがカナダを代表するものとして表紙イラストなどで表現されるというものである。ただし、扉絵には第13版の壁画アートの写真のように、必ずしもそうとは言い切れないものも存在している。

## 4. 考察

本章では、前章で挙げた主要パートの内容から分かる傾向について述べたい。

### 1) 東西主要地域への偏り

表紙イラストと扉絵の写真を地理的に考えると、選ばれる場所がほぼ西部（ブリティッシュコロンビア州とアルバータ州）と東部（オンタリオ州とケベック州の南部そしてプリンス・エドワード・アイランド州）という主要地域に限られていることが分かる。雪をいただく山々、ラフティング、先住民アートは西部の観光資源であるし、カエデ・紅葉は東部の名物である。壁画アートの場所は筆者には不明であるが、アフリカ系の若者による路上パフォーマンスは“多文化・多民族都市トロント”を連想させる。

言い換えれば、ひと目でサスカチュワン州とマニトバ州という中央部、ユーコン準州・ノースウェスト準州・ヌナブト準州という極北地域、またプリンスエドワードアイランド州以外の大西洋沿岸の諸州だと分かるものは、基本的に含まれていない。巻頭特集からは



オーロラが主要な観光資源の一つになっていることが分かるが、その他のものには登場しない。

巻頭特集でも基本的に同じである。この傾向はすでにカナダ編で最初の巻頭特集である第9版のもの、すなわち「メープル街道」と「ビーバー街道」の二つの旅行ルートの紹介に表れている。両者はそれぞれナイアガラ〜ケベックシティ、バンクーバー〜カナディアンロッキーという東西主要地域のルートについてのものだ。

ただし、表紙イラストや扉絵と比べて巻頭特集はバラエティに富んでいるので、東西主要地域以外のものも含まれてくる。その傾向は比較的近年しかも極北地域に確認できる。たとえば、第26版ではオーロラが紹介されているし、第32版にはユーコン川のカヌー旅行に関する特集が加えられている。

それ以前の巻頭特集の中で異彩を放っているのが、第14版の巻頭特集「カナダの最新情報」のヌナブット準州であろう。この特集には分量が1ページ当てられ、空路などに関する簡易なマニュアル情報とともに、「厳寒の地を訪れる旅は厳しい反面、魂を揺さぶられるほど感動的な出会いが待っている」という文言で結ばれている（地球の歩き方編集室 1999：11）。けれども大半は準州成立の経緯、イヌイットを取り巻く社会状況、順州首相の紹介という社会文化的な情報になっている。デスティネーションにおけるこうした、いわば硬い側面への注目は「地球の歩き方ガイドブック」シリーズ全体の中でもどちらかと言うと珍しいものであり、その点興味深いものではあるが、いずれにしても総体的な観光情報の薄さは、カナダ編において極北地域などが観光地として重視されていない事実を物語っているとさえ言える。

最後に、コピーの「果てなしの大平原」という表現は、サスカチュワン州やマニトバ州の平原部分を想起させるが、東西主要地域への偏りも含めて考えれば、むしろグレートプレーンズを構成するアルバータ州の平原部を指していると考えerのほうが適当であろう。

## 2) 自然の重要性

主要部分では、風景や自然観光など、何らかの自然を資源にしたものが多数を占めている。先に述べたように、デスティネーション的紹介文と表紙コピーは、大自然を強調し、そこに“赤毛のアン”を付け加えるというものであった。表紙イラストの主題や巻頭特集の内容も基本的に同じである。

カナダ編が薦める“大自然”には、カナディアンロッキーや紅葉、それらを堪能するドライブ・鉄道旅・国立公園・州立公園・庭園、ナイアガラの滝、オーロラ、自然を用いた各種アクティビティやスポーツ、野生動物見学、そして“大自然が育んだ”料理・食材やコスメまで、多様なものが含まれている。

“赤毛のアン”観光は、普通は文化観光の部類に含まれるようであるが、第27版の特集

「四季で見るカナダの絶景巡り旅」のように、プリンスエドワード島が“カナダの夏”を経験する場所に選ばれることもある。そこでは、「真っ青な空の下カナダの大自然と触れ合いたい」（地球の歩き方編集室 2013：15）として、赤毛のアンの人形、グリーン・ゲイブルズ、そして花咲く草原が、もう一つの“夏”の名所とされるカナディアンロッキーとともに紹介されている。

表紙のなかでまったく自然の記号が含まないケースは、第10版の王立騎馬警察のものや第21版のアイスホッケー選手のもの、あるいは第27版のジャック・カルティエ広場のものくらいであろう。ただし、前二者については、カナダ国旗のカエデを自然の記号とみなすこともできるかもしれない。先にも触れたが、カナダ東部の観光においてカエデは紅葉やメイプルシロップ（ならびにその抽出）として重要な自然観光資源となっているからだ。第29版扉絵の赤いカエデの葉はそれを示しているといえる。

他にも“自然”と解釈するかどうか容易ではない例がある。トロントのスカイラインを用いた三件（第11版の表紙や第16版、第28版）については、オンタリオ湖を“自然”とみなすべきか意見が分かれるであろう。オンタリオ湖のクルーズ観光は、もちろん湖なしには成り立たないものの、巻頭特集で“カナダの自然”を味わうアクティビティとしてアピールの対象になることがないからだ。その一方で、国会議事堂前のチューリップ（第19版の扉絵や29版の表紙など）やバンデューセン植物園を歩く女性（第30版の表紙など）は、むしろ“自然”として数えるのが妥当である。“カナダの四季”を楽しむといったテーマの巻頭特集で両者は“春”の目玉となっているからである（第32版）。

### 3) 文化的多様性の軽視

カナダは言わずと知れた世界で初めて多文化主義を法制化した国であり、今日でも多文化主義を国是として毎年多数の移民を受け入れ続けている。2013年にカナダ政府が行ったカナダ人のアイデンティティを問う調査によれば、カナダ人が共有する価値観として回答者の過半数が「二言語」、「民族的多様性」、「先住民への敬意」を挙げているという<sup>6)</sup>。しかし、カナダ編の主要部分では、カナダ社会の自己アイデンティティに文化的多様性が深く関わっているという事実は軽視されていると言わざるを得ないレベルにある。

たとえば多文化主義という言葉が主要部分のなかに表れるのは二箇所しかない<sup>7)</sup>。一つ目が、第11版の特集「メープル街道に見る2つの文化」のなかで「2言語多文化主義」とい

6) 詳しくは、(飯野、2021)を参照。

7) そのほかに、本書で言う主要部分には含めていないが、第28版で巻頭特集の前に設けられた「カナダって、こんな国 おもわず『へ〜』なトリビアからおもしろネタまで集めました!」という箇所の中にも、「理想世界の縮図」として「世界初の『多文化主義政策』を取り入れた国」という紹介がある（地球の歩き方編集室 2014：13）。

う表現を用いてモンリオールとトロントを紹介している箇所である（地球の歩き方編集室 1996：7）。もう一つは、後述する第12版の巻頭特集「カナダの土地と人々」であり、「カナダは2言語・多文化主義」という表現が見られる（地球の歩き方編集室 1997：9）。

紹介文とコピーには文化的多様性に関する要素は見られない。表紙では第24版のイヌクシュク、扉絵では第12版のビル・リードの彫刻と第17版のトーテムポールくらいである。

ケベックについていえば、表紙でシャトー・フロンテナック（第10版）とジャック・カルティエ広場（第27版）というケベック州のランドマークが用いられているが、後述するように、ケベック的なものが主要部分で重用されることがそう多くはない事実からすると、両者は文化的多様性の一環として選ばれたというよりも、その他のランドマークと同じように、単によく知られたものとして表紙で用いられたと考えるべきと思われる。

巻頭特集のなかで文化的多様性を正面から取り扱うものは、第12版の巻頭特集「カナダの土地と人々」のみ、一回きりである。同特集のリード文は次のとおりである（ibid.: 9）。

「カナダ人」と聞いて、すぐに思い浮かべる共通したイメージというのではないのではないだろうか。実はカナダ人自身、これが典型的なカナダ人像である、というものはもっていないようなのだ。むしろ、ケベック州民とかマニトバ州民といった、ローカルなアイデンティティの方がはるかに強いといえる。

本文の中では「イギリス系」から順に、「フランス系」、「ドイツ系」、「ウクライナ系」、「中国系」、「ユダヤ系」、「先住民」という節に分け、カナダの民族集団（のいくつか）を用いて“カナダ人”の多様さを説明している。

個々の民族集団として見ると、最も頻出するのは先住民であろう。これは、先に引いたカナダ政府による調査が示すカナダ社会の“先住民への敬意”がさまざまな社会文化的領域、中でも観光政策や観光産業に現出し、それが日本の旅行メディアにも反映された結果であろう<sup>8)</sup>。いずれにしても、多くはブリティッシュコロンビア州の観光地を紹介するときに言及されたり、先住民の歴史が関わる世界遺産の説明であったり、カナダのアートの紹介箇所で先住民アートが取り上げられたり、あるいは、土産のなかに先住民に関するモノが加わっている際に先住民が触れられる程度である。

逆に、もっぱら先住民に焦点を当てた特集は限定的であり、また、各版の特集群のなかで一番最初に位置づけられることはない。合計で5件あり、すでに述べたヌナブット準州に関する第14版、先住民文化に三つの特集を当てている第22版、先住民アートに注目した

8) 現地の社会・文化・政治的動向のどのようなものがどの程度日本のツーリズムに反映するのかについては、台湾を例に論じたことがある（岩田、2016）。

第24版・第25版、そして西部の先住民文化を取り上げた第26版になる。このように、第14版をのぞけば2010年のバンクーバー五輪前後に集中しているだけである。

ケベック的なものについても同様の傾向を指摘できる。カナダの東西主要観光地域の東側に位置していることもあり、巻頭特集のなかでケベック文化が紹介されることは珍しくない。たとえば料理を取り上げる箇所である。けれども、ただそれが一つの特集としてアピールされるかとなると、上記先住民文化と同様に限定的である。第26版の「カルチャー旅 ヨーロピアンムード漂うビクトリア、ケベックシティ」で、「イギリス文化が香り立つ花の都・ビクトリア」に対して「フランス文化が残るケベック・シティの古い町並み」として同市が紹介されているか（地球の歩き方編集室 2012：33）、その他には第31版で「カナダの中のフランス、モントリオールを旅する」という特集があるくらいである。

最後に移民の存在についてであるが、主要部分における取り扱いにはさらに小さい。上述の第12版の巻頭特集「カナダの土地と人々」は例外的であり、とくにニューカマーとなると、料理やトロントの紹介など、基本的に特集のなかで言及されるにすぎない。

そもそも主要部分においては、“カナダ人”の存在自体が希薄である。もちろん表紙に人は描かれるし、扉絵に人が写っていたりもするが、巻頭特集でカナダの人々と交流する行動がアトラクションとして紹介されることはない。もっともその傾向は『地球の歩き方ガイドブック』シリーズ全体（さらには旅行メディア一般？）にも言えることであるかもしれない。

## 5. おわりに

本稿は、1990年から2019年までの間に刊行された計28件の『地球の歩き方ガイドブック』シリーズ・カナダ編を対象に、同シリーズにおいてどのような場所・事物がカナダの観光対象と位置づけられているのかを明らかにすべく目的に議論を進めてきた。

分析ではとくにカナダ編のなかで価値情報が集まる主要部分、すなわち表紙、表紙コピー、扉絵、エッセイ的なデスティネーション紹介文、巻頭特集に焦点を当て、その傾向から“カナダの魅力”を探った。その結果明らかになったのは以下の三点である。

第一に、関心が東西主要地域に偏っているという点である。つまり主要部分における地理的関心は、西部（ブリティッシュコロンビア州とアルバータ州）と東部（オンタリオ州とケベック州の南部そしてプリンス・エドワード・アイランド州）に集中する。オーロラなどの自然資源を持つ極北地域（ユーコン準州・ノースウェスト準州・ヌナブト準州）はまだしも、サスカチュワン州とマニトバ州という中央部、プリンス・エドワード・アイランド州以外の大西洋沿岸の諸州が主要部分に表れることはまずない。

第二が自然の重要性である。表紙イラストでは山、森、湖・川、滝といった自然を示す記

号が多用され、デスティネーション紹介文や表紙のコピーでは自然の魅力がアピールされる。また、巻頭特集は自然を元にしたり、自然と関係する事物で溢れている。こうした傾向は、本稿の冒頭で示した日本人旅行者間でのカナダ人気の特徴に合致したものである。

第三が文化的多様性の軽視である。カナダにとって多文化主義は国是であり、実際にカナダの人々からの評価され、自己意識の重要な部分を占めている。けれども、それとは対照的に、文化的多様性はカナダ編の主要部分においてけっして中心に位置するのではなく、むしろ周辺的と言っていい取り扱いである。たしかに先住民的なものは巻頭特集でも取り上げられているが、それさえも“大自然”の後塵を拝し、あたかもその圧倒的な力を前にしてなす術がないかのようである。

ただし、こうした志向が同シリーズ独特のものとは必ずしも思えないことに触れておきたい。東西主要地域への偏り、自然の重視、多文化共生の軽視は、筆者の見るかぎり他のガイドブックにも大いに当てはまる特徴である。また、ガイドブックが売り物である以上、読者の関心（需要）に軸足を置いた商品作りに励まざるを得ず、「地球の歩き方ガイドブック」シリーズのメジャーさを思うと、この志向がかなりの程度“日本社会の好み”に従ったものであると言ってよい（この点は冒頭で述べた観光統計の結果とも一致する）。さらにいえば、本稿では観光政策や観光産業からの先住民表象への影響として言及するにとどめたが、ガイドブックに現地観光当局の広告（広告的な記事も含む）が含まれることが珍しくないことを思うと、以上の志向の少なからぬ部分が現地からの意向を反映したものであるとも想定できる。

最後に今後の課題を挙げておきたい。まず他のガイドブックや他種の旅行メディアを含めた考察である。本稿では『地球の歩き方ガイドブック』シリーズ・カナダ編に限定して分析を試みたが、同シリーズにはカナダ東部とカナダ西部を独立して扱う編がある（ここでも中央部などは除外されている）。また「地球の歩き方」以外にも『るぶ情報版』などの著名なガイドブックが存在するし、テレビ（とくにBSチャンネル）も旅行情報を日々発信している。こうした多種多様な旅行メディアを含めた比較分析が必要である。

次に、本稿でも指摘した旅行メディアにおける文化的多様性の表象についての考察である。移民がマジョリティとなる多文化主義国家としては、カナダの他にオーストラリアが有名である。本稿で得た知見をオーストラリアに関する旅行メディアと照らし合わせることに加えて、“移民”や“エスニック”などのキーワードに注目して考察すれば、旅行と文化的多様性をめぐる問題についてさらに理解が深まることが期待できる。

## 謝辞

本研究は、愛知大学人文社会学研究所プロジェクト・研究会助成「多文化主義国家カナダに関する旅行メディア知の研究」の支援を受けたものである。記して感謝したい。

## 参考文献一覧

注)「地球の歩き方ガイドブック」シリーズについては、直接的に引用したものを記載するにとどめた。また、同シリーズの著者名の「地球の歩き方編集室」に「『地球の歩き方』編集室」というようにカギ括弧が付くことがあるが、煩雑さを避けるために、ここではカギ括弧を除いている。

飯野正子 2021「カナダ人のアイデンティティ：最近の調査報告から」日本カナダ学会編『現代カナダを知るための60章』明石書店。

岩田晋典 2016「茶アイデンティティの多元化：『地球の歩き方ガイドブック』シリーズ台湾編における表象分析」『文明21』第40号、63-80頁。

ダイヤモンド・スチューデント友の会 1979『地球の歩き方 ②アメリカ』ダイヤモンド・ビッグ社。

地球の歩き方編集室 1988『地球の歩き方 ②カナダ』ダイヤモンド・ビッグ社。

地球の歩き方編集室 1991『地球の歩き方 ②カナダ』ダイヤモンド・ビッグ社。

地球の歩き方編集室 1993『地球の歩き方 ②カナダ』ダイヤモンド・ビッグ社。

地球の歩き方編集室 1996『地球の歩き方 ②カナダ』ダイヤモンド・ビッグ社。

地球の歩き方編集室 1997『地球の歩き方 ②カナダ』ダイヤモンド・ビッグ社。

地球の歩き方編集室 1999『地球の歩き方 ②カナダ 2000～2001年版』ダイヤモンド・ビッグ社。

地球の歩き方編集室 2012『地球の歩き方 B16 カナダ 2012～2013年版』ダイヤモンド・ビッグ社。

地球の歩き方編集室 2013『地球の歩き方 B16 カナダ 2013～2014年版』ダイヤモンド・ビッグ社。

地球の歩き方編集室 2014『地球の歩き方 B16 カナダ 2014～2015年版』ダイヤモンド・ビッグ社。

日本交通公社 2019『旅行年報 2019』日本交通公社。

日本交通公社 2021『旅行年報 2021』日本交通公社。

山口さやか・山口誠 2009『「地球の歩き方」の歩き方』新潮社。